

糖尿病治療の最前線

常識にとらわれずに 診断することの重要性

ディーエイチイーイー

DHEAの不足が倦怠感を招いたKさんのケース



担当医 久保 明先生

医学博士
糖尿病内分泌専門医
東海大学医学部教授

患者氏名

K・A様

年齢

60歳

性別

男性

現病歴

糖尿病、胆石

今

回は、糖尿病によく見られる症状の中にも、別の原因が潜んでいる場合がある、というお話です。

今年で60歳になるKさんは、私のクリニックに8年間通院しておられ、飲み薬で治療を続けています。空腹時血糖値は120～135 mg/dl、ヘモグロビンA1cは6～7%で推移し、いい数値とはいえないものの、合併症もなく、安定した状態を維持しておられました。そんなKさんが、ここへ来て倦怠感を訴えてこられたのです。糖尿病にはよくある症状ですが、胆石をお持ちでしたので、肝機能障害も視野に入れ調べてみました。しかしとくに異常はありません。

そこでKさんには、「健康寿命（抗加齢）ドック」を受けてもらうことになりました。これは、遺伝子検査などによって、さまざまな疾病リスクの可能性を予測するというものです。

検査の結果、Kさんは「DHEA」の

分泌量が、非常に少ないことがわかりました。DHEAとは、副腎皮質でつくられる性ホルモンのもととなる重要なホルモンで、その量は老化の目安になります。Kさんの場合、同年代の平均値1500～2000 ng/mlを大きく下回る750 ng/mlしかなく、DHEAの不足から、倦怠感が生じたと思われる。

DHEAを補う医療用サプリメントで治療を行ったところ、2カ月間で数値が回復し、症状も改善することができました。

一般的に、今回のような検査は、糖尿病の診察では行いません。倦怠感のように、よくある症状の場合ならなおさらです。しかし、原因が糖尿病とは別のところにあったという事実は、私たち医師もきちんと受け止め、既存の常識にとられない診察を心がけなければと痛感いたしました。